



山口雅弘 [著] (日本キリスト教団 引退牧師)



# 「生きる」をいつくしむ

## ガリラヤに生きたイエスの「共食と共生」

1月下旬刊行予定



### イエスによる「神の国運動」、 その中心は「共に食し、共に生きる」こと！

「キリスト教の原点」であるイエスの生き方を現代に回復することこそ急務。  
キリスト者か否かを問わず「平和」を求めるすべての人びとに贈る力作！

著者は現代に満ちる暴力と戦争の悲惨な連鎖を見据え、「希望」を見失わずにイエスの「実像」と宣教の使信に迫る。イエスが示す「共食」は、理不尽な苦しみを強えられる人にとって「共生」の喜びの時を育む源、人を非人間化する「社会悪と宗教悪」に抗う時と場になった。この「共食と共生」の生き方とローマ帝国の極刑であった「晒し柱」（十字架刑）のイエスの処刑死を「贖罪信仰」へと神学化し、「キリスト教」も諸悪の温床になっていることを歴史批判的に検証。『ガリラヤに生きたイエス』に続く第2弾！

<p><b>主な目次</b> まえがき</p> <p>第一章 「人間の实態」を見る視点／「人間学」の視点から／ユダヤ民族の生き方の特徴</p> <p>第二章 「共食と共生」の課題／「共に食べる」という切り口から／平和の源と希望としての「共食と共生」／弱いことはすてきな時代／食を共にすること／「神よ、なぜですか！」と祈る前に／それでも「希望」を失わず</p> <p>第三章 「共食と分かち合い」の物語の前史／「罪つくりな「原罪」の教え／「食物」をめぐる最初の記事／「未知の世界」に踏み出すイブ／「失楽園」に生きる人間／神のように「なれない」人間</p>	<p>第四章 ユダヤ教律法の価値基準／「食」のタブー／「共感・共苦」</p> <p>／「福音書の「食」物語を素材にして／歴史の「ターニングポイント」になる物語／三 垣根や境界線を超える視点／四 「食」をめぐる主な問題のまとめ</p> <p>第五章 洗礼者ヨハネとイエス／いなごと野蜜／イエスの先駆者／イエス時代の人びとの生活環境／三 食事と保存食の知恵／第六章 「罪人」との食事／旅人イエス／ド・ダ・ヴィンチの問いかけ／二 イエスの最後の食事／三 愛を施しを受ける日々／【コラム10】 イエスとガリラヤ人の日常語／三 徴税人レビのもてなし／四 「罪人」との食事</p> <p>第七章 五千人との共食／「憐れみ」の心／五つのパンと二匹の魚／二 分ければ増える／三 イエスの「ちむぐりさ」</p>	<p>第八章 イエスの「遺言」／ホスピタリティ／ガリラヤの民衆が伝えるイエスの「共食」／二 旅の食事とイエスの「遺言」／三 「共食」の根底にあるホスピタリティ／四 自立と分かち合いの生き方</p> <p>第九章 イエスの処刑前の食事／最後の晩餐／レオナルド・ダ・ヴィンチの問いかけ／二 イエスの最後の食事／三 愛</p> <p>主な参考文献表／あとがき／各章に【コラム】</p>
--	--	---

**著者略歴：**山口雅弘（やまぐち・まさひろ）1948年札幌に生まれる。日本聖書神学校卒業。以後、日本キリスト教団諸教会の牧師を歴任。アメリカ・ケンブリッジ Episcopal Divinity School に留学（神学修士号取得）。単位互換制度によりハーバード大学神学校で学び、米国長老派研修施設（ニューヨーク）常駐神学教師、並びに諸教会の協力牧師。日本聖書神学校講師（新約学）。現在、日本キリスト教団引退牧師。著書：『イエス誕生の夜明け：ガリラヤの歴史と人々』、『よくわかる新約聖書の世界と歴史』（以上日本キリスト教団出版局）、『イエスの道につながって：教会暦による随想とメッセージ』（新教出版社）、『ガリラヤに生きたイエス：いのちの尊厳と人権の回復』（2022、2023<sup>2</sup>ヨベル）。編・著書：『聖餐の豊かさを求めて』（新教出版社）。翻訳書：M.ヘンゲル著『イエスは革命家であったか』（共訳、新教出版社）、L.ウィリアムソン著『現代聖書注解—マルコによる福音書』、P.パーキンス著、P.パーキンス著『現代聖書注解—ペトロの手紙1・2、ヤコブの手紙、ユダの手紙』（日本キリスト教団出版局）、M.ディベリウス著、H.コンツェルマン改訂増補『牧会書簡注解—第1・第2テモテ書、テトス書』（教文館）。

新書判・288頁・1,650円（税込）  
1,500円＋税 ISBN978-4-911054-35-2 C0216